近世紀行文にみる鎌倉観光の成立過程に関する研究

瀬畑　尚紘[1]・横内　憲久[2]・岡田　智秀[3]・押田　佳子[4]

[1]学生会員　日本大学大学院理工学研究科不動産科学専攻
（〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14，E-mail:takahiro-sebata@hotmail.co.jp）
[2]正会員　工博　日本大学理工学部建築学科
（〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14，E-mail:yokouchi@arch.cst.nihon-u.ac.jp）
[3]正会員　工博　日本大学理工学部海洋建築工学科
（〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1，E-mail:t-okada@ocean.cst.nihon-u.ac.jp）
[4]正会員　農博　日本大学理工学部社会交通工学科
（〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1，E-mail:oshida.keiko@nihon-u.ac.jp）

現在の鎌倉観光は，北鎌倉や長谷，鶴岡八幡宮周辺など拠点ごとの魅力が注目されているが，近世当時の徒歩観光で創出されていたであろう拠点間の繋がりはほとんど考慮されていない状況にある．そこで本研究は，鎌倉観光の原初的な時期にあたる近世を対象とし，その時期に数多く出版された紀行文より当時の鎌倉観光の主流経路を把握し，それを成り立たせている空間的･景観的特徴を明らかにした．

キーワード: 近世，紀行文，鎌倉，観光，成立過程，海岸名所，旅行形態

１．はじめに

観光はわが国の経済や雇用，地域の活性化に多大な利益を生みだす産業として注目されている．2007 年よりわが国で施行されている観光立国推進基本法では，観光立国の実現に関する施策の基本理念として，地域における創意工夫を生かした主体的な取り組みを尊重しつつ，地域住民が誇りと愛着を持つことのできる活力に満ちた地域社会の実現を促進し，わが国固有の文化，歴史等に関する理解を深めるものとしてその意義を一層高めることを目標の一つに掲げている[1)]．さらに自然環境，歴史，文化等の資源を創造，再発見，整備をし，これらを内外に発信することにより観光立国を目指すことを重要視している[2)]．

このようななか，各自治体が独自の観光施策を取り組んでいるが，わが国の国際的な観光地のひとつである鎌倉では(図－１)，1996 年に第１期鎌倉市観光基本計画，2007 年に第２期を策定しており，「鎌倉らしさにこだわる観光」「伝統と快適性が調和した観光空間」の実現を目指している[3)]．また，「鎌倉市の観光事情平成 20 年度版」においては，「地域が一体となった観光振興の連携と実現」として，隣接する横浜市，藤沢市，逗子市，葉山町との連携を図り，広域的な観光施策を目指している[4)]．

この鎌倉観光発展に至る歴史は古く，江戸時代(以下，近世)まで遡る．近世になると，東海道や中山道といった街道や宿場の整備または北前船の東廻り･西廻り航路が開かれたことで，江戸から京の間で人や物が流れるようになり，将軍や大名，公家から一般の庶民に至る幅広い階層の人々による旅も全国的に活発化した[5)6)]．

1673年には，徳川光圀が藩内巡見において鎌倉を経由して江戸へ戻った際の記録を1674年に「鎌倉日記」[7)8)]として著し，1685年には「新編鎌倉志」が刊行された．これらは，後に旅行者の鎌倉案内書として役割を果たすようになり，鎌倉幕府滅亡以降，都市として衰退していた鎌倉の古都観光の発展に大きく貢献した．

1833 年には，「東海道中膝栗毛」の著者であり，化政文化を代表する大衆作家の十返舎一九によって「金草鞋(かねのわらじ)」[8)]が刊行された．同じころ，絵師である葛飾北斎による「富嶽三十六景」や歌川広重による「東

図－１　研究対象地

海道五十三次」「富士三十六景」などにおいて七里ヶ浜や江の島，富士山をテーマとした浮世絵が描かれるようになった．このように，大衆文化の発展に伴って，鎌倉の景観の素晴らしさが世に広まったことにより，鎌倉観光が急速に脚光を浴びるようになり，その後発展していったと考えられる．

一方，こうした時代を経て，現在の鎌倉観光は，北鎌倉や長谷，鶴岡八幡宮周辺，由比ヶ浜など拠点ごとの魅力が注目されているものの，近世当時の徒歩による観光で創出されていたであろう拠点間の繋がりについてはほとんど考慮されていない状況にある．その結果，前述した「他地域との観光施策における連携」においても不十分な状況にあり，地域が一体となった観光推進は模索状態にあると考えられる．

以上を踏まえ，本研究は，鎌倉観光の原初的な時期にあたる近世を対象とし，その時期に数多く出版された鎌倉における紀行文より当時の主流経路を把握し，それを成り立たせていた海岸名所および旅行形態の特徴を明らかにすることを目的とする．

２．先行研究と本研究の位置付け

近世における鎌倉観光を対象とし，紀行文を題材とした研究として押田らの研究[9]がある，この研究において押田らは，「鎌倉市史近世近代紀行地誌編」(以下，「鎌倉市史」)[8]に編纂されている十返舎一九(以下，一九)著の「金草鞋」の読取りより一九の観光経路(図－２)における

図－２　十返舎一九による観光経路

表－１　調査対象文献(計 18 文献)

文献番号	紀行文名	発行年	著者	総頁数
1	鎌倉順礼記	1633	沢庵宋彭	20
2	東海道名所記	1658	浅井了意	3
3	鎌倉日記	1674	徳川光圀	78
4	鎌倉紀	1680	自住軒一器子	32
5	東海潮騒記	1762	三浦江斎	5
6	東路の日記	1767	不明	19
7	草まくらの日記	1773	本居大平	2
8	相中紀行	1797	田良道子明浦	31
9	三浦紀行	1801	一鶴堂白英	15
10	江の島	1805	大島完来	8
11	鎌倉日記	1809	扇雀亭陶枝	14
12	遊歴雑記	1821	十方庵大浄	18
13	江の嶋の記	1821	菊池民子	11
14	鎌倉日記	不詳	祖　祐	9
15	金草鞋	1833	十返舎一九	10
16	鎌倉御院日記	1835	小山田与清	14
17	江の島紀行	1855	李　院	8
18	東海紀行	1859	小田切日新	3

通過地点の景観構成とその観賞形態を捉えているが，その対象とする年代と旅行者は限定されている．しかし，鎌倉を舞台とした近世紀行文は「金草鞋」以外に，「鎌倉市史」に多数掲載されているものの，それらを網羅的に分析した研究はこれまでにみられない．

これに対し，本研究は近世に刊行された鎌倉に関する紀行文を網羅的に取り上げて，当時の鎌倉観光の主流経路やそれを成り立たせている空間的･景観的特徴を捉えるというものである．

３．研究方法

(１)調査対象文献

本研究では，「鎌倉市史」に網羅的に掲載されている，近世に出版された鎌倉紀行文全 31 文献のなかで，旅行者の道中の様子が把握可能な紀行文 18 文献(表－１)を対象として，著者が「鎌倉中」に進入してから，「鎌倉中」を抜け他の地域へ移動するまでの過程における旅行形態の特徴を把握する．

(２)分析項目

まず，近世における鎌倉観光成立に至る観光経路を把握するため，18文献の読取りより旅行者の主流経路を捉える．次に，主流経路上における旅行者の景観体験の場である主要な視点場を把握するため，海岸名所とその観賞形態を捉える．最後に，近世鎌倉における旅行形態を把握するため，徒歩による移動の過程で旅行者の重要な拠点となっていた宿屋や茶屋といった滞在拠点と利用目的を捉える．

４．「鎌倉」の定義

本研究で対象とする近世の鎌倉は，相模国鎌倉郡とされ，その領域は中世以降，世相を反映して変化してきた．そこで本研究では，旧四角四境祭(幕府の四隅と鎌倉外との境界部の魔除のために行われた祭)に関する文献資料[11]において「鎌倉中(京都でいうところの洛中)」とされた，「六浦(現横浜市金沢区)」「固瀬河(現藤沢市)」「小壺

図－３　研究対象範囲

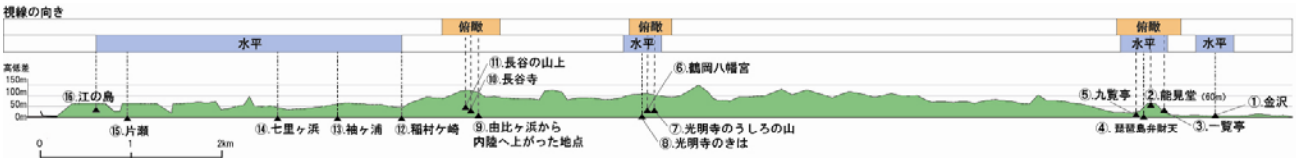
(現逗子市)」「小袋坂(現鎌倉市)」をそれぞれ東西南北の境とした(図－３)．

５．結果および考察

(１)移動経路の特徴

表－１に示した18文献の中で紹介された移動経路を整理してみると，４．鎌倉紀，６.東路の日記，９.三浦紀行，13.江の嶋の記，14.鎌倉日記，16.鎌倉御覧日記，17.江の島紀行，18.東海紀行の８文献が共通して東から西の進路がとられていた．これは先行研究で捉えた一九の

図－４　近世鎌倉における移動経路と海岸名所



図－５　海岸名所の標高と各地点における旅行者の視線の向

表－２　海岸名所(①～⑪)における海岸景観に関する記述および旅行者の視線の向き

海岸名所(視点場)		文献番号	記述	視線の向き
①	金沢	4	金沢に入る程ちかく海をうしろに見そめたり．是は安房・上総の方成べし．浪は雪のやうに白くみゆる．	水平
			(潮野を越て金沢の台から)富士・足柄を霞に見．伊豆の御崎はまの前也．大かた聞及よりも見てはおとれる物から，こよなう眺まさり．	
		13	ゆきゆきて金沢のほとり近うなりけるに，ながめいはんかたなし．	
			(金沢の里なる扇屋から)さて宿りにかへりて海つらを見やるに風凪日うらゝかにて，塵にまがへる沖の舟の真帆かた帆のさまざまなる，浪にうかみておもしろく，又は網引なす舟の数おほく，浪をひらきてはしるなンど絵に書たるやうなり．	
		14	廃前入江の詠めに女性たちの歓び面ニあらはれて，労もおもハず暑さ忘て余念なきさま，八景にけふの暑さをとられけり	
②	能見堂	4	潮ニ潮のさし引によりて入江のけしきかはり，嶋もあるかと見ればかくれ，又なき所にも岩ほもあらはるゝやうなれば，筆を捨けるも理りなる哉　見るまゝに汐のみちひる百嶋や　えもうつされず筆捨のまつ	俯瞰
		6	此能見堂はふるさとにても聞つたへ侍りしかなざわといへる所の海も山も島も橋も野も只ひと目に見え侍りとて名だゝる所也．	
		13	爰かしこの浦はのけしきさやかに見えわたりて，海士の塩やく煙りなンどのほの立わたりたるもいとめづらしくかへすがへすもあかぬながめなりけり．遠かたの浦はのくまも遠目かね　手にとるはかり見えわたりけり	
		14	此所之風景人の知る所なり．　能見れハ目に見ゆるもの皆涼し　瀬戸の入江に両三年此かた新田をひらかれしが，御ハさをし今も青々と見へ渡り有難．八景にそへて青田の詠め哉	
		16	金沢の能見堂に御こしをよせさせたまひて八景のさまを見そなはす御詠　なかめやるやつのけしきそめつらしき　もろこしまても行こゝちして	
		17	この所の景色筆にもおよび難しとて，いにしへ巨勢の金岡が筆を捨けんも実にことわりとおほゆ．	
③	一覧亭	9	首を回らせば六浦・瀬が崎・三艘が浦・瀬戸の明神・乙艘の浦・筆捨松に夫婦松・能見堂を東に，洲崎・柴崎只目前に有るが如し．	俯瞰
		17	南はるかに安房・上つふさの山々見渡され，浦賀の崎・さる島・ゑぼし島・夏しま・海つらにさき出，ひんがし北をのそめば，称名の遠寺・小家ほのかに見ゆ，乙友・平かた・野島・洲さき・瀬戸を見おろし，又見かへれば，うち川より富士のしら雪はるかにて，何にたとへむやうもなし．	
④	琵琶島弁財天	4	橋をこへゆけば十間あまりの小嶋なれ共金沢一芯の景をこめて見る所也．水底すみて石の数も見えわたり，四方は山，前は海，幽なる宮居にあらゆる詠めをふくめり．	水平
		6	こはいり海の中へ長う嶋をつき出したり．そこになん行は海の中にゐるやうにて，風さへなくてそらうへにさゞら浪のよするけしきのえもいはずこゝろものどかになりていみじう面白ければ，・・・	
⑤	九覧亭	14	前通りて金竜禅院飛石寺，山内裏山八景一の地，是よりの風景言語に絶し，祐ハ門前に待居つゝ，景色いかにと問けれ共，一同唯感心の外言葉なし．	俯瞰
		16	飛石山金竜院のうしろの山より御らんじやらせ給ふけしきえもいひがたし．	
		17	こゝよりはるかにのぼりてひとつの詠の亭あり．きのふ見し一覧ていとはまた八景のさまかはりて，いとおもしろし．百千度見るともあかし金沢や　とりならへたるやつの名所	
		18	水色山光映帯旭日，風景絶麗，総宜二字不虚伝，金竜院為八勝一覧之地，山下怪石名之飛石，九覧亭・臥遊亭在山上，金沢全勝縮于寸眸中，板橋双々横截碧波行人如可呼者為瀬戸，・・・	
⑥	鶴岡八幡宮	4	坂の上より真一筋に浜面の海みゆる．	俯瞰
⑦	光明寺のうしろの山	16	わかえのしま，由井が浜，稲村が崎など眼の中にありてえもいはず．	俯瞰
⑧	光明寺のきは	4	ここは海辺にて沖も磯もはれやかなり．	水平
⑨	由比ヶ浜から内陸へ上がった地点	4	是より上の方へ上り，浜を遠く見なして大仏へ出る道に，塔の辻とてかの北条屋形のあたりより所々七重計の石の塔有，こゝにも見へたり．	俯瞰
⑩	長谷寺	16	こゝより鎌倉の海を見やらせ給ふに，あま小舟のさしかへるさまなどいときよふあり．かつをつりかへるを舟にものゝふか　むかしおほゆるかまくらの海	俯瞰
		17	本堂よりひんがし南を望めば，由井が浜・三浦三崎のはてまで残りなく見へ渡りて，まことに絶景なり．	
⑪	長谷の山上	4	海の面見わたされてよき景なれど，まだ雪やまず，堂前の松枝光かゞやく．	俯瞰

表－３　海岸名所(⑫～⑯)における海岸景観に関する記述および旅行者の視線の向き

海岸名所(視点場)		文献番号	記述	視線の向き
⑫	稲村ケ崎	6	いなむらがさきに出ぬれば，右のかたは打つゞきたる小山にて，左はかぎりもしらぬ青うなばらも，	水平
⑬	袖ヶ浦	9	しき浪に独りや寝なん袖が浦　さはく凄に寄る船もなし	水平
		14	茶店ニ暫時休息して左リニ稲村ヶ崎，右ハ七里ヶ浜，海上遥ニ伊豆の大嶋を遠見し，西の方ハ江の嶋，遠くハふじ山・箱根山を打詠め，景色言語ニ絶し思はず時をうつす．	
⑭	七里ヶ浜	13	七里ヶ浜にいたれば海の面は限りなきまで青う見え渡りて，（中略），よせてはかへす浪の音のおどろおどろしきも，めなれぬ身には限りなうおもしろし．しかのみならず遠なる舟は(中略)，こぎゆくなンどさまざまのながめなりけり．	水平
		16	なゝ里の浜もとゝろによせかへる　八重のしほちのおきつ白波	
		17	右の方，横手が原の古跡有，見かへれば由井が浜・袖ヶ浦，浪の向うよせかへるもいとめづらし．	
		18	時日気晴朗天無纖翳，驚濤撒花大洋万里，大島在前画島在右三浦三崎在，断壁千尺突出于海面者為稲村崎・・・	
⑮	片瀬	17	浜辺より海面を見渡すに風景殊にすぐれたり．門前に四五軒茶店あり．	水平
⑯	江の島	4	(まないた石から)むかひに伊豆のはしま大嶋見えて一面に海なり．はるかなる浪の立居をわけ来ても　衣うき世をはなれ江のしま	水平
		6	いざいざといふにぞ又なん岩本院にまかりて高どのにのぼりてければ，夕づく日のさし入たれど，そと吹わたる風のすゞしきに下ははるかに海のおものかぎりなきまでに見ゆるが，浪もしづけくてつりするあまにやあらん小舟の二三行かふに，大山・箱根山の目の前に見えわたりたるさまいはんかたなきに，ふるさとの丘子の君に見せばやと思ふのみかは．	
		9	(魚板石から)此石上より四方を回望すれば，万里の回船海上に浮び，駿豆・上下総・安房の諸峯眼前に在り．泣面が崎・聖天島・鵜島・二つ屋倉など，其絶景短筆にとゞ難し．	
		13	(稚児が淵から)海の面は風なぎて静にあさりする海士のほこらはしげなる，げに何にたとへん朝びらきなど打こたはれぬ．	
		16	海上に舟のあまたうかびたるを見て，松室真雄，めにさはるものもなみ間にちりうかふ木葉おほめくあまのつり舟	
		17	(まな板石から)こゝより右に伊豆の山々，左りに三崎の浦々，また沖の方に大島見ゆ．誠に絶景なり．	
			(まな板石のうへ少しこ高き所から)まな板石のうへ少しこ高き所へあがるに，（中略），しばらく海のおもて，磯うつ浪のけはひなどながむるに，（中略），さながら白たへの中にたゝずむ心地ぞする．	

辿った経路(西から東)とは正反対の進路である．またこれ以外の10文献における別経路はいずれも１～２件足らずと少数であることを把握した．このことから，本研究ではこれら８文献で得られた経路を近世鎌倉観光の主流経路と捉えることとする．そこで，この主流経路を細分化すると，図－４に示す経路Ａ(文献番号４，６，14)，経路Ｂ(文献番号13，17，18)，経路Ｃ(文献番号16)，経路Ｄ(文献番号９)の４経路に分類できた．

(２)海岸名所の抽出

次にこれらの主流経路における，海岸名所とその観賞形態を明らかにする．

８文献において海岸景観を望む記載がされている地点を抽出した結果，図－４に示す全 16 ヶ所の海岸名所が捉えられた．このうち，稲村ケ崎から片瀬にかけての鎌倉海岸沿いに位置する「⑫稲村ケ崎」「⑬袖ヶ浦」「⑭七里ヶ浜」「⑮片瀬」「⑯江の島」(計５ヶ所)は，すべての経路で登場し，鎌倉における名所の中心であることが分かる．また，図－５より鎌倉海岸(⑫～⑮)を除く海岸名所は標高が高い地点が多く，移動の過程で地形の変化に富んだ経路が取られていたことがわかる．

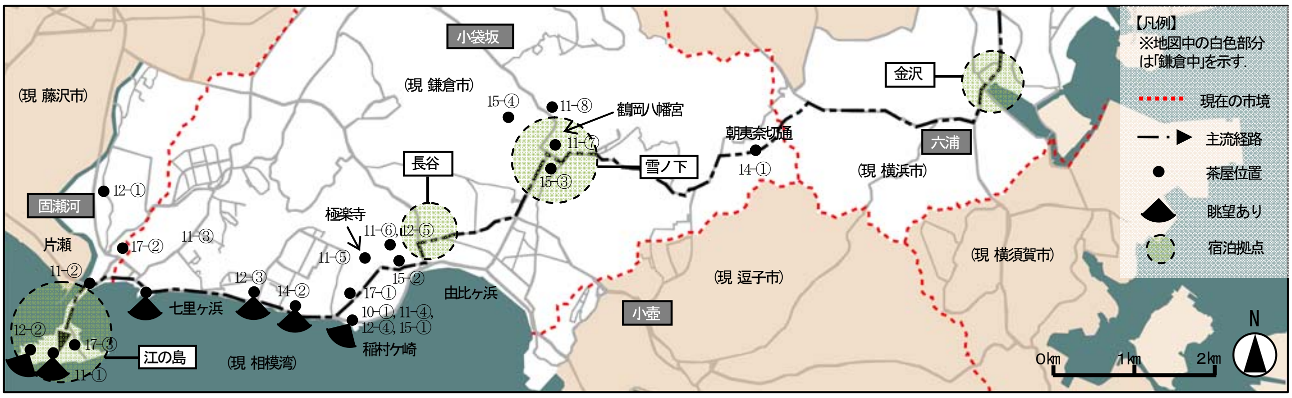
風景に関する記述は，表－２，３に示す全 16 ヶ所の海岸名所でみられ，「①金沢」「②能見堂」「③一覧亭」「④琵琶島弁財天」「⑤九覧亭」では，「金沢八景」を俯瞰または水平にて一望する視点場であることが記されていた．また，「②能見堂」は，風景に関する記述箇所の多さより重要な視点場であったことが伺える．さらに，「⑥鶴岡八幡宮」「⑩長谷寺」「⑪長谷の山上」など標高が高い内陸部は，海岸を遠景として俯瞰する視点場となるのに対し，海岸近くに位置する「⑦光明寺のうしろの山」や「⑨由比ヶ浜から内陸へ上がった地点」は，旅行者が光明寺や由比ヶ浜を訪問した後に高台へ移動し，海岸を近景の俯瞰として眺めた視点場となっている．一方，「⑫稲村ケ崎」から「⑯江の島」の範囲では，鎌倉海岸沿いに複数の名所が距離をおいて存在することから，旅行者は視点場を移しながら低地より水平に富士山や江の島を海岸シーン景観として捉えていたと類推される．くわえて，これらの海岸名所は全経路の中で，最も近景として海岸を望める視点場であり，記述でみられた「白波」「海の面」「小舟」といった視対象の動的状態が静的な海岸シーン景観の中に織り込まれることにより，旅行者が同一線上の複数の視点場に立ち止り，短時間に様変わりする海岸景を楽しんでいたと推測できる．以上より，主流経路における近世鎌倉の海岸名所は，標高の異なる視点場より旅行者が様々な形で観賞していただけでなく，内陸名所を訪れる際に垣間見える水面が徐々に近づくことで鎌倉海岸の海岸景への期待が膨らみ，海岸に到着するや視対象を周囲の動的要素を含めてシーン景観として捉えていたことが把握できた．

(３)滞在拠点の把握

主流経路上には宿泊拠点である宿屋や道中の休憩地点である茶屋に関する記載がみられ，徒歩による観光では滞在拠点が重要であったことを把握した．以降は，主流経路および茶屋位置･宿泊拠点を図－６に，紀行文別による宿屋と茶屋の存在場所(地名)および旅行者の利用目的とその記述を表－４および表－５に示し，これらをもとに，宿屋および茶屋の分布状況，またそれらの拠点における旅行者の利用目的を明らかにする．

a)宿泊拠点の形成

表－４において「宿屋」の記載は，紀行文 18 文献中 14 文献でみられ，主として「金沢」「雪ノ下」「長谷」「江の島」の４地域に存在したことが捉えられた．そのうち，特に記載が多くみられたのは「雪ノ下」の 11 文献，「江の島」



図－６　主流経路および茶屋位置･宿泊拠点　番号は，(文献番号－茶屋番号)を表し，表－４と対応する.

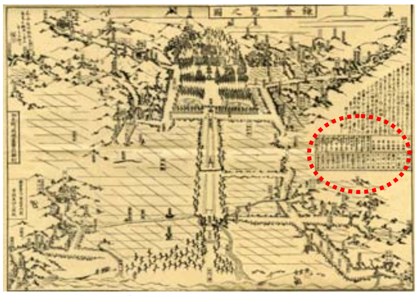
表－４　紀行文別による宿屋の存在場所(地名)および旅行者の利用目的とその記述

文献番号.紀行文名(著者)：年代	宿屋							
	存在場所(地名)	屋号(店名)	旅行者の利用目的 宿泊	食事	休憩	景観眺望	見物･通過	記述(代表的な文のみ掲載)
1.鎌倉順礼記(沢庵宋彭)：1633	雪ノ下		●					「爰をば雪の下といふ、折からあひにあふやどり也．冬されに宿とひよれは折にあふ　雪の下てふ名さへあやしき　やどりは瑞垣ちかき所なり．」「くれて雪の下のやどりにかへり，五山の様体ども所の者にとふ．」
2.東海道名所記(浅井了意)：1668								
3.鎌倉日記(徳川光圀)：1674	江の島	岩本院		●		●		「巌本院再ビ酒饌ヲ設テ饗ス．多景ニヒカレ，シバシバ盃ヲ傾ク．人ヲシテ下宮ヲ見セシム．」
	雪ノ下		●					「薄暮ニシテ旅寓ニ帰リヌ．」「遂ニ雪ノ下ヘ出テ旅寓ヘ帰リヌ．」
4.鎌倉紀(自住軒一器子)：1680	雪ノ下		●					「又雪の下のやどりへ帰りて酒などたうべて休みぬ．」「日も暮かたに及ぬれば雪の下の宿に帰りぬ．夜すがら酒などたうべてあそべり．月おもしろし．」
5.東海済勝記(三浦迂斎)：1762								
6.東路の日記：1767	雪ノ下		●					「(中略)こゝなん雪のしたてふ人やどりするところなり．そこにとまりぬ．」
	江の島	岩本院	●					「岩本院といへるすぎやうざの家にいりてしばしものし侍り．」「今宵はこゝにし侍ればとて我もまたゑひぬれば，たれも彼もこゝろのどけく面白がりていね侍りぬ．」
7.草まくらの日記(本居大平)：1773								
8.相中紀行(田良道子明甫)：1797	雪ノ下		●					「これより東の方長谷小路を経て雪の下の旅亭に至て宿す．宿する所の旅亭ハ雪の下の社人加茂左京なるものゝ家なり．」
9.三浦紀行(一鶴堂白英)：1801								
10.江の島(大島完来)：1805	雪ノ下		●					「雪の下の舎りにしてはからずも秋山雅帰の詣逢ぬる事のたのしくも心澄めば　夜寒さや絵のもの語句の咄」
11.鎌倉日記(扇雀亭陶枝)：1809	江の島	岩本院	●					「此日は岩本院こんざつして，別の宿りに入る．」「人々皆島を立れければ，片山氏より案内有て，巳刻過頃院の一間にうつる．」
	長谷	三ツ橋屋		●				「長谷なる三ツ橋といへるにて，ひるのしたゝめする．生々しき鯵を火とらす　爰は泊宿有所なり．」
	雪ノ下						●	「壇桂半に琵琶橋・中の鳥居，雪の下，泊宿軒をつらねたり．」
12.遊歴雑記(十方庵大浄)：1821	江の島	ゑびす屋		●				「(中略)，岩屋より出し頃は雨頻なれば，福団子もろくくに味はで，竜燈の松の茶店に海上を眺望し，頓てゑびすやへ立戻り，二階の見はらしへ通りて昼餉したためぬ．」
	雪ノ下(鶴岡八幡宮西の坂)						●	「雪の下類焼して天行(はやり)賑ふは，此節長谷の観音前と鶴が岡西門通り坂路の旅籠やなりけり．」
		明石屋	●					「(中略)，八幡の西坂なる明石屋は身近き縁者なれば止宿せよといひ教えしまゝ，建長寺等へ逍遙の折から見込て通りしが，住居も広からで薄闇き構ゆへ，しらぬ顔に行過，一泊せざり．」
13.江の嶋の記(菊池民子)：1821	金沢	扇屋	●			●		「何くれと時をうつしてたそがれ近うなりければ，やどりもとめんとてすさき町瀬戸ばしなンどいへるおもしろき所々をながめつゝ，金沢の里なる扇屋とかのもとに宿りぬ．」「さて宿りにかへりて海つらを見やるに風凪日うらゝかにて，塵にまがへる沖の舟の真帆かた帆のさまぐなる，浪にうかみておもしろく，又は網引なす舟の数おほく，浪をひらきてはしるなンど絵に書たるやうなり．」
14.鎌倉日記(祖　祐)	金沢	東屋			●			「坂を下りて瀬戸橋を渡り，東やニ着す．」
	金沢	千代本					●	「外ニ両三軒之内，千代本当時流行の旅籠や，前通りて金竜禅院飛石寺，山内裏山八景一の地，(中略)」
	雪ノ下		●					「下山して御門前雪の下ニ旅宿をもとめ一宿ス．」
	江の島	紀の国屋	●					「紀の国や半六方へ宿リ求ム．」
15.金草鞋(十返舎一九)：1833	雪ノ下						●	「八まんぐうのまへのまちを，ゆきのしたといふ、ちやや，はたごやおほし．かまくらいつけんのひとは，こゝにてあんないをとりてよし．」
16.鎌倉御覧日記(小山田与清)：1835	江の島	岩本院			●	●		「岩本院の富士見の間にいらせたまふに，雲かゝりて見えわかざりければ御詠　ふしのねかそれかあらぬかしろたへの　雲まのくもの色そことなる」
17.江の島紀行(李　院)：1855	金沢	東屋	●					「まがりまがりて瀬戸橋のかたはらなる東屋といへるに至りぬ．今宵のやどりをこゝに定めて，(中略)」「(中略)，この山をおりてまた舟に棹さし，瀬戸の東屋に帰りぬ．」
	長谷	三ツ橋屋	●					「長谷の三ツ橋屋へ，戌の刻近き頃やどる．」
	江の島	恵比寿屋	●					「渚に出て舟渡りして江の島へ上り，恵比寿屋といへるにやどりを定めて，坂をのぼれば，なかばに下の宮の別当所あり．」
18.東海紀行(小田切日新)：1859	雪ノ下		●					「(中略)，廻廊・層塔丹碧相映夕陽，投雪下旗亭，二十一日，晴小雨，過小帒坂到建長寺，(中略)」
	江の島	夷子亭	●					「(中略)，余牢抱岩尖呼吸之間潮退僅得不死，晩投夷子亭，魚鮮鯗鮑加飲数太白，(中略)」
計 ※()内の数字は記載文献の合計	金沢(3)，雪の下(11)，長谷(2)，江の島(8)		17件	3件	2件	3件	4件	

の８文献であった(表－４)．例えば，「鎌倉日記(扇雀亭陶枝，1809 年)」[7]では，「壇桂半に琵琶橋･中の鳥居，雪の下，泊宿軒をつらねたり．」「此日は岩本院こんざつして，別の宿りに入る．」と記述され，これら２地域が鶴岡八幡宮や江ノ島弁財天など主要な通過地点付近にあったことから，多くの旅行者の需要を満たす滞在拠点であったことが伺える(図－６，表－４)．また，「鎌倉一覧之図(1850)」[12]には，雪ノ下から金沢や江の島など他地域までの距離が記されており，雪ノ下が鎌倉における中心地であったことが伺える(図－７，８)．同様に，「東海道名所図会(1797)」[13]に描かれている江の島の様子から岩本院周辺が旅行者の滞在場所になっていたことが伺える(図－９)．

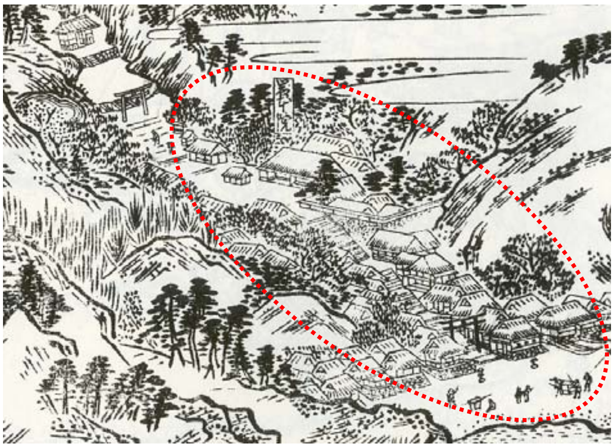
旅行者の利用目的(表－４)についてみると，宿泊が 17 件と大半ではあるが，時代の経過に伴って食事や休憩のみといった一時的滞在も増加するようになり，「鎌倉御覧日記(小山田与清，1835)」[8]では，その著者が岩本院の「富士見の間」から絶景を望んでおり，展望地としての

役割も果たしていたことが伺える．また，宿屋の記載の特徴として，「岩本院」や「東屋」など具体的な屋号（店名）が多く記載されていた．この要因として，「岩本院」のような老舗旅館が，時代経過に伴い名所化したことが推測



図－７　鎌倉一覧之図（1850）

図－８　鎌倉一覧之図（1850）の拡大図



図－９　東海道名所図会（1797）

表－５　紀行文別による茶屋の存在場所（地名）および旅行者の利用目的とその記述

文献番号. 紀行文名（著者）：年代	茶屋						
	存在場所（地名）	屋号（店名）	旅行者の利用目的				記述（代表的な文のみ掲載）
			休憩	景観眺望	絵図販売の視認	見物・通過	
1. 鎌倉順礼記（沢庵宋彭）：1633							
2. 東海道名所記（浅井了意）：1668							
3. 鎌倉日記（徳川光圀）：1674							
4. 鎌倉紀（自住軒一器子）：1680							
5. 東海濟勝記（三浦迂斎）：1762							
6. 東路の日記：1767							
7. 草まくらの日記（本居大平）：1773							
8. 相中紀行（田良道子明甫）：1797							
9. 三浦紀行（一鶴堂白英）：1801							
10. 江の島（大島完来）：1805	①稲村ケ崎		●		●		「一ひらの紙に図してかまくらの山の古戦場を物がたるあやしき茶店に憩ひて絵ときする嫗に打れな秋の蝿」
11. 鎌倉日記（扇雀亭陶枝）：1809	①岩屋前		●	●			「岩屋まへ出茶屋の床机に休，福団子とてあきなふ．これを求，此所にのみ鳩多く居て，人になれて，よぶにつれ，手もと迄も来り，かの団子をとらす．人のそばへ近く来てくらふ．団子やりつくせば，鳩は外へ舞去る．けふは波あらく，岩のうへにうち上げ，白浪みだれて岩ほに滝をあらはし，百筋のながれを見する．雨後の景色誠ことに絶景也．　時ならぬ雪の岩ほにうつりきは浪の花をもちらす江のしま」
	②江の島の島根部分					●	「十八日は空も晴ぬれば，朝間岩本院を立て，島を過ぬとするに，汐高くして島根迄浪打寄，よしずまとゐたる出茶屋の二軒程も，波にひたりぬれば，渡し人の肩を労すまでもあらじと，島根つたへ東浜漁場に行て干潟にをり，（中略），網うちする漁夫あり．」
	③小動の出崎の袂ヶ浦		●	●			「此浜の片辺に床机ならべたる茶店に休て七里浜眺望す．」
	④稲村ケ崎	ばゞが茶屋	●		●		「いなむらの崎の茶屋に休．ばゞが茶屋といふ由．ここにて鎌倉の絵図ひさぐ．」
	⑤極楽寺の門前		●				「門前の茶店に駕籠をやすむ．夫より虚空蔵堂，宝物，明星石・貝の玉・九穴貝・唐銭・唐鏡有．此所高みにて見はらしよろし．」
	⑥景政社の前		●				「景政社のまへにても床机ならべ茶をにて，力餅・□□子といへる有．是に休み，これをもとむ．」
	⑦赤橋そば					●	「おのれは政之輔をつれて，雪の下八幡の御社近迄行廻りて，赤橋といへる橋のわきのかたに出茶屋有．」
	⑧巨福呂坂	猿茶屋	●				「これよりもとの道にかへりて，総門を出れば，家つづきにて巨福呂坂なるに，猿茶屋と云に休て，酒筒をひらき，鰺ぬたてふ物作せぬ．庭の真なかに，大きやかなる猿をつなぎ置たり．此茶屋店は，江戸より遠乗の騎しや休足の所なり．」
12. 遊歴雑記（十方庵大浄）：1821	①藤沢から片瀬近辺					●	「過し文化四丁の卯年三月，おなじく文化六己巳年八月，爰を通行せし頃までは途すがら憩ふべき茶店もなかりしに，今年文政四辛巳どし通行し見ればところぐに心聞たる茶店出来て，急雨は勿論よろづ不自由なきは感ずるに堪たり．」
	②児が淵の上		●	●			「（中略），雨ふり出しければ妙栄尼をば児が淵の上なる竜燈の松の側の茶店に待せ置，是より両女を同道し，児が淵をくだり，巌頭を伝はりく岩屋へ参詣しける．（中略），岩屋より出し頃は雨頻なれば，福団子もろくくに味はで，竜燈の松の茶店に海上を眺望し，頓てゑびすやへ立戻り，二階の見はらしへ通りて昼餉したためぬ．」
	③行合川近辺		●	●			「これ等の古跡あらく指さし教て，頓て行あひ川の彼処の出茶屋にやすらぬ．（中略）されば茶店の床机に憩ひて四方を眺望するに，西にはゑのしまより右につゞきてもろこしが原・霊山が崎・片瀬・腰越の村々又髣髴として，雲間には芙蓉峰をながめ，北はなだらか成山々の波濤のごとくつらなり，而も山形質朴にして処斑に小松の生ぜしあり，或は青草碧苔の綺麗に生ぜし兀山もありてまじかく望み，後を顧れば遥に稲村が崎の茶店に人の集る様は動くとは見ゆれど，老眼には黒くして炭団の如し．」
	④稲村ケ崎		●	●			「（中略），頓て又稲村が崎の茶店にやすらひ，荒磯の見納ぞとて，いよく風景を賞し，いつまでも眺望し慰むを，色々にすかして，牛に乗てよと勧むる牛飼の集るも又一品にして，是より日蓮の袈裟かけ松，極楽寺の什宝，虚空蔵堂の宝物，ほしの井戸，長谷の大観音，光則寺中の日朗が一命にかはりたる四人の徒の身替り堂，日朗が土の牢，扨は大仏と次第して案内し，頓て権五郎景政が社へ参詣して，社内の出茶屋に憩ふ．」
	⑤権五郎景政社内		●				
13. 江の嶋の記（菊池民子）：1821							
14. 鎌倉日記（祖　祐）	①朝比奈切通の峠		●				「朝比奈の切通しを打越んと，峠の茶店に一同労を休．　アヽウント峠の息や玉の汗」
	②袖ヶ浦		●	●			「鎌倉権五郎景政の御社を拝し，星の井，極楽寺の切通し，左り之方ニ日蓮上人袈裟掛松，袖ヶ浦ニ至ル．茶店ニ暫時休息して左りニ稲村ヶ崎，右ハ七里ヶ浜，海上遥ニ伊豆の大嶋を遠見し，西の方ハ江の嶋，遠くハふじ山・箱根山を打詠め，景色言語ニ絶し思はず時をうつす．　なみにうつる影や目につく皐月富士」
15. 金草鞋（十返舎一九）：1833	①稲村ケ崎近辺				●	●	「はまべよりかまくらみちいるところにちややあり．こゝにてかまくらのゑづをいだし，こうしやくしてこれをあきなふ．よこてはら，にちれん上人のけさかけまつあり．それよりこくうぞうどう，ほしのゐ，むらたてば，ちややおほし．これよりはせのくわんおんあり．」
	②虚空蔵堂近辺					●	
	③雪ノ下					●	「八まんぐうのまへのまちを，ゆきのしたといふ．ちやや，はたごやおほし．かまくらいつけんのひとは，こゝにてあんないをとりてよし．」
	④網引き地蔵前		●				「じやうくはうみやうじのけいだい，ちやんいんに，やひろいぢぞうあり．あみびきぢぞうは，このさんちうにあり．（中略）［狂歌］阿み引のちそうのまへのちや屋にきて　あとひきちさけのむそたのしき」
16. 鎌倉御覧日記（小山田与清）：1835							
17. 江の島紀行（李　院）：1855	①十一人塚近辺					●	「十一人の塚有．程なく支度茶屋とて三軒あり．七里ヶ浜にいづ．右の方，横手が原の古跡有．見かへれば由井が浜・袖が浦，浪の向うよせかへるもいとめづらし．」
	②龍口寺の門前					●	「夫より片瀬村竜の口山へ詣づ．院内に光りの松，うろの内に妙見大士を安置せり．左りの方，上人の土の牢，祖師の鋳像を安置せり．本堂は敷革堂とあり．左りの方に七面の御社あり．浜辺より海面を見渡すに風景殊にすぐれたり．門前に四五軒茶店あり．」
	③江島神社近辺					●	「爰より左りへ廻りて上の宮に詣づ，慈覚大師の開基とかや．此宮の別当所有．金剛水とて頂に清浄の水あり．こゝより廻りて茶店二三軒あり．」
18. 東海紀行（小田切日新）：1859							
計	23件		14件	６件	３件	９件	

される(表－４)．以上より，近世鎌倉観光における宿屋は，旅行者の需要を満たす主流経路上の滞在拠点として，金沢，雪ノ下，長谷および江の島に立地することが捉えられた．さらに，時代の経過とともに，宿泊以外の一時的滞在の場としても扱われるようになり，この背景には，宿屋の名所化や展望地化などがあったことを考察した．

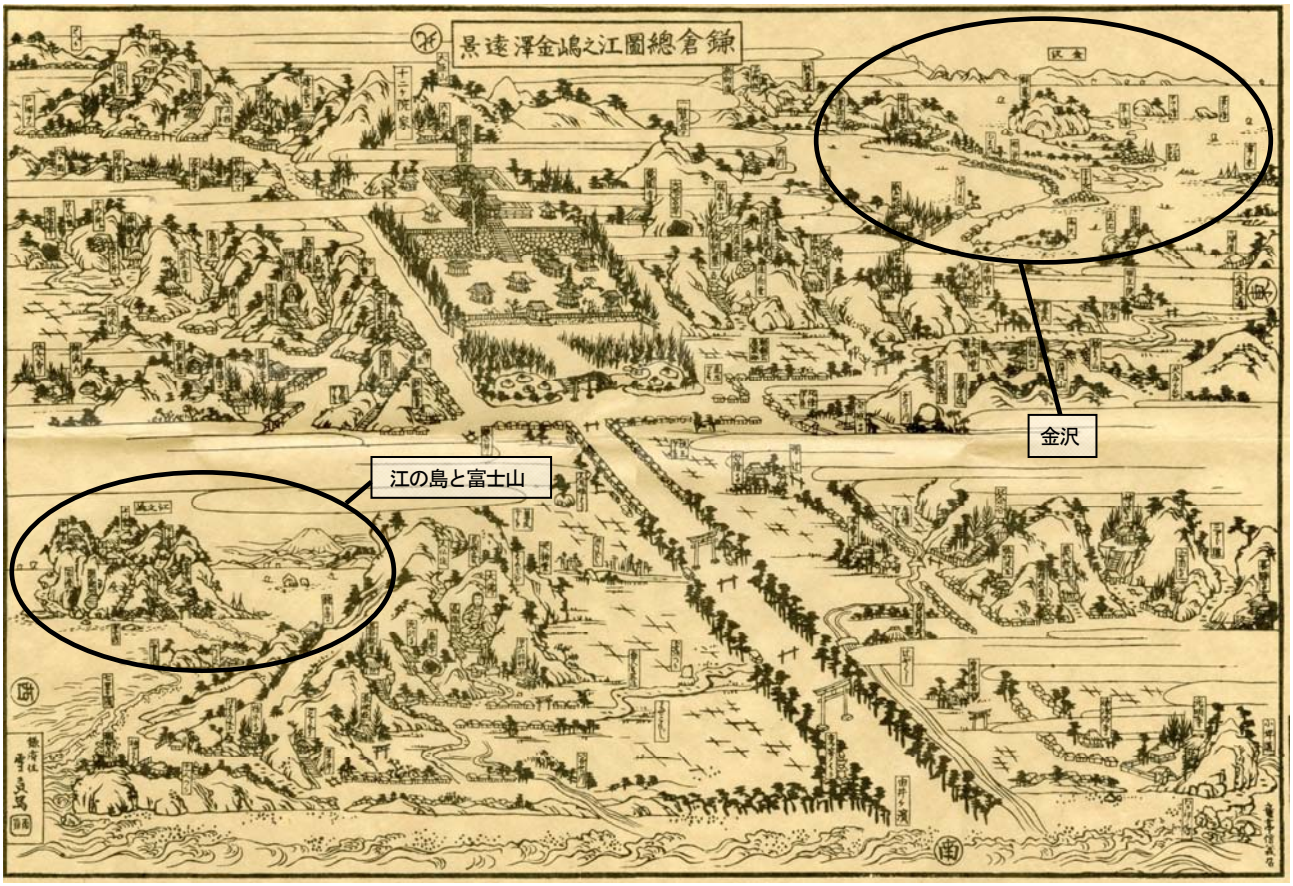
b)茶屋の成立過程

表－５において「茶屋」の記載は，紀行文 18 文献中６文献でみられ，地域別には図－６より雪ノ下や鶴岡八幡宮近辺に４軒，稲村ケ崎から片瀬までの鎌倉海岸沿いに５軒，長谷寺や極楽寺近辺に４軒，江の島に３軒みられた．「鎌倉勝概図(1798 年)」[12]（図－10）には扇雀亭陶枝による「鎌倉日記」[8]で登場した「さる茶屋」(図－11)が描写されており，当時の人々に休憩場所として認識されていたことが推測できる．また，歌川広重によって描かれた「相模七里ヶ浜」[6]（図－12）には，その描写内容から旅行者が七里ヶ浜に建てられた茶屋より海岸景や七里ヶ浜を歩く人々を眺める様子を伺い知ることができる．

図－10　鎌倉勝概図(1798 年)

図－11　鎌倉勝概図中のさる茶屋

図－12　相模七里ヶ浜



図－13　鎌倉総図江之嶋金澤遠景(1854～1860)

旅行者の利用目的(表－５)についてみると，鎌倉海岸沿いと江の島では，茶屋を視点場として「鎌倉日記(扇雀亭陶枝，1809 年)」の「此浜の片辺に床机ならべたる茶店に休て七里浜眺望す．」や「鎌倉日記(祖　祐)」の「茶店ニ暫時休息して左りニ稲村ヶ崎，右ハ七里ヶ浜，海上遥ニ伊豆の大嶋を遠見し，西の方ハ江の嶋，遠くハふじ山・箱根山を打詠め，景色言語ニ絶し思はず時をうつす．」など海岸景を眺望した記述が６件みられ，休憩と景観眺望を同時に行う傾向がみられた(図－６，表－５)．特に稲村ケ崎は，「鎌倉日記(扇雀亭陶枝，1809 年)」の「いなむらの崎の茶屋に休．(中略)ここにて鎌倉の絵図ひさぐ．」の下りや，「遊歴雑記(十方庵大浄，1821 年)」[8]の「稲村が崎の茶店にやすらひ，荒磯の見納ぞとて，いよく風景を賞し」の下り，さらに「金草鞋(十返舎一九，1833 年)」の「はまべよりかまくらみちいるところにちややあり．こゝにてかまくらのゑづをいだし，こうしやくしてこれをあきなふ．」より，茶屋が観光客向けの絵図の販売や，海岸景を愛でる場として捉えられていたことが伺えた．図－６に示すように稲村ケ崎は，雪ノ下から江の島へ向かう中間点にあり，さらに主流経路上で一気に開ける海岸景を最初に望める地点であったことより，景観を売りとした茶屋街が発達したとみられる．また，茶屋を見物するのみの記載も多くみられ，「遊歴雑記(十方庵大浄，1821 年)」では，藤沢から片瀬近辺の茶屋(図－６，12－①)において「過し文化四丁の卯年(1807 年)三月，おなじく文化六己巳年(1809 年)八月，爰を通行せし頃までは途すがら憩ふべき茶店もなかりしに，今年文政四辛巳どし(1821 年)通行し見ればところぐに心聞たる茶店出来て，(中略)．」とあり，約 20 年間に及ぶ藤沢から片瀬近辺における茶屋街の形成過程が捉えられる(表－５)．

以上より，鎌倉観光における茶屋は，1800 年代初頭より鎌倉海岸沿いを中心に，絵図の販売や良好な景観が売りの観光発展の拠点的施設として活発に展開されていたことが把握できた．

６．おわりに

本研究では，近世鎌倉観光における主流経路を捉えた，さらに，その主流経路上には海岸景観を愛でる視点場として機能していた海岸名所が，多数存在したことを把握した．また，それらの海岸名所では，多様な観賞形態がとられており，その理由として旅行者は，鎌倉の地形の変化を巧みに利用していたことが捉えられた．さらに滞在拠点の把握により，近世鎌倉での旅行形態が，主流経路上の宿泊拠点４地域において，時間の経過とともに宿屋や茶屋での滞在のあり方が多様化，かつ休憩を含めてゆっくり巡る形態へと変化したことを捉えた．その背景には，宿屋の名所化や茶屋による観光発展の確立があることが類推された．

図－13 は，1854 年から 1860 年に発行され，袖ヶ浦の茶屋(図－６，14－②付近)で売られていた「鎌倉総図江之嶋金澤遠景」[12]であるが，この図では，中央に鶴岡八幡宮が布置され，東に金沢，西に江の島，さらにそこから眺望可能な富士山が一枚に収まるように描写されている．この図に示されるように近世鎌倉の観光形態は，現代の地形図の概念とは異なり，本稿で捉えた広範囲に及ぶ観光領域での名所や景観といった見どころが，位置や距離にとらわれずに網羅するような価値観の上に成立していたことが伺える．

一方，現在の鎌倉市のホームページに掲載されている観光マップ[14]は，鎌倉市域のみが表示され，各市での観光交流の分断化が進行している様子が伺える．これは，本来名所間の移動の際に捉えられたストーリー性の欠如を引き起こすと考えられる．今後，鎌倉は歴史性を有した都市観光を発展させるべく，徒歩による伝統的な観光経路の継承を目指し，各市間(横浜市，藤沢市)および名所間の繋がりを再認識する上で，近世に捉えられたヒューマンスケールでの旅のあり方をかんがみ，滞在拠点となる金沢，鎌倉，江の島の３地区の整備，さらには，道中における標識や茶屋など，ルート確立のための仕掛けづくりが必要であると考えられる．

参考文献

1) 国土政策研究会:「観光立国推進基本法要綱」，国土と政策(26),pp.7～９，2007
2) 観光庁HP:http://www.mlit.go.jp/kankocho/
3) 鎌倉市:「第２期鎌倉市観光基本計画」，2006
4) 鎌倉市:「鎌倉市の観光事情平成20年度版」，2008
5) 神奈川近世史研究会:「江戸時代の神奈川古絵図でみる風景」,有隣堂,P50,1994
6) 佐藤和彦,錦昭江:「図説鎌倉歴史散歩」,河出書房新社,P107,P109, 1995
7) 鈴木暎一:「徳川光圀」,吉川弘文館,P126,2006
8) 鎌倉市市史編さん委員会:「鎌倉市史近世近代紀行地誌編」,吉川弘文館,pp. ３～543,1985
9) 押田佳子，横内憲久，岡田智秀:「十返舎一九「金草鞋」を通じてみた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその観賞形態に関する研究」，ランドスケープ研究73(５)，pp.519～522，2010
10) 西田正憲:「江戸後期における瀬戸内海の新しい風景視点の萌芽」，ランドスケープ研究58(５)，pp.33～36，1995
11) 松尾剛次:「中世都市鎌倉の風景」，吉川弘文館，2004
12) 澤寿郎:「鎌倉古絵図･紀行―鎌倉古絵図篇」,東京美術,1976
13) 松原正明 :「東海道名所図会　復刻版　下巻」,羽衣出版,P322,1999
14) 鎌倉市HP:http://www.city.kamakura.kanagawa.jp/